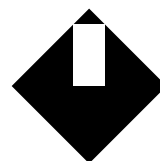


公認会計士稲門会



「会長挨拶」



渡辺 俊之

(昭和43年第一商学部卒業)

公認会計士稲門会の会員の皆様こんにちは。
平成27年7月3日の総会において会長に選任された渡辺俊之です。

すでに会長となって一年が経過しますが、会員の皆様には、日頃より会務にご理解、ご協力頂き誠に有難うございます。

私自身の職業会計人としての世界も、そろそろ先が見えつつある中、会長に就任するにあたって、稲門会のホームページ上では、私の考え方をお伝えしてありますが、紙面でのご挨拶は初めてですので、わが業界で過ごしてきた事を振り返りつつ、重なる部分もありますが、この業界に身を置くものの先輩としての所感を述べてみたいと思います。

1. 同業種交流の重要性

我々の仲間には、同業種の会合には一切参加しない方もいます。「同業者と付き合っても意味ないでしょ？」といった発想が根底にあるらしいです。しかし考えていただきたい。特に同じ職業会計人でも公認会計士業務は、グループで業務を遂行する機会が多いといえます。私自身の経験からしても、仲間に助けられてこそなした業務や会務が、数えきれないくらいあります。

金融機関監査、大学の学校法人監査、包括外部監査等々精通者とのコラボレーションで、責任者としての自身の足りない部分を補ってくれた仲間がいてこそ、現在の私があります。

監査法人に属さない個人の会計事務所経営者としてはありがたい存在です。

これらの数多くの仲間は、協会活動や委員会活動、学校関係のお付き合いの中から相乗効果を生みながら形成されてきて、相互扶助・切磋琢磨のなかから自身の成長へと結びついていった結果です。

そして同業者との付き合いの最大のメリットは、必要情報、気が付かなかった情報、経営方法等のヒント等々が得られることです。

ですから同業者との交流、協会役員等の経験は重要です。そしてその原点は公認会計士稲門会にあります。

2. 異業種交流の重要性

私どもの仕事上で、重要な点は、税務業務・監査業務・コンサル業務でそれぞれ多少の意味合いの違いはあるものの、顧客との信頼関係こそが大事になります。そして信頼関係は人間関係の延長線上にあります。人間性の向上こそが相手を説得できる大きなカギとなります。

その意味で異業種との交流が自分自身を啓発する意味で大切です。

私自身、若い時代はあちこちの異業種交流グループとの付き合いも多く、毎日のように夜の酒場を飲み歩いたり、カラオケ交流・交遊に浸っていました。しかしそれら遊び仲間等との長い長い付き合いから事務所の基盤も支えられていきました。

このような付き合いの中から人脈の広がりも、予想外のところに展開していきました。

若手の中小企業創業経営者、2代目経営者、上場を目指している勢いのある経営者、上場企業の社外役員としての会社内部からガバナンスのあり方への自問自答。

個人経営の老夫婦とおつきあい。同族経営の中でありがちな経営陣のいがみあい、兄弟喧嘩、親子喧嘩。それらの紛争に取り込まれないようにしつつ、バランスの取れた公正なアドバイス。様々な異業種の方々とお付き合いの中で、人生経験を踏み、顧客にも恵まれ、60歳代での働き方にこそ、顧客の視点に立ったよきアドバイスができた時代だと認識できます。異業種交流の重要性と人間性啓発の重要性がここにあります。

3. 人脈に頼らない事業展開の重要性

人脈を原点とした信頼関係作りの重要性については言うまでもないことですが、これに頼っていてもいけないということに気が付かされたのは、私の税務のクライアントの社長の話でした。

出版社から30歳の時に独立し、従業員30人程度になっていた税務業務のクライアントがあります。彼は業界誌・月刊誌の編集業務でその規模まで成長しました。

しかしその経営者は、ある時、数年かけて今までの仕事から方向転換し、全く違う分野に進出し、今は従業員200人の会社に成長しています。

その社長に、事業転換の理由を尋ねたところ、「コネや従来の付き合いの延長線上で仕事やって

いたら、限界がありますね。先生の業界も同じでしょ？」そして彼は、人脈や、コネや、過去のつながりとは縁のない世界での事業展開で成功したのです。

「先生の業界も同じでしょ？」の問いかけにハッとしたのですが、もうこの年になってしまいましたので、過去の反省として、人脈に頼らない事業展開の重要性をも、お伝えしておかなければと思います。

4. 体に沁み込んだ知識の重要性

会長としての一年間を振り返ってみると知るべき知識が体に沁み込んでいないと痛感します。

会社のナンバーワンたる社長とナンバーツーである副社長との間には、その責任の重みに大きな隔たりがあるのは、我々のクライアントの社長を見ていれば痛感します。

と同じように、会長職はそれほどの忙しさがあるわけでもないのに、その重みを感じざるを得ない場面に出くわします。

その場面は内部的活動においてではなく、対外的活動において感じる機会が多いのかもしれませんが。

早稲田大隈精神の神髄やら、大隈侯の生立ち、世の中へのデビューのきっかけ、76歳にして二度目の総理大臣に担がれた経緯等々、ますますこの年になって、知らなければならぬことが増え続けています。

平成28年度定期総会のお知らせ

平成28年度定期総会は、下記の通り開催の予定です。会員はもとより早稲田大学で教鞭をとっておられる先生方、他大学よりの来賓の方々も多数出席され懇親のよい機会です。是非多数の会員に参加をお願い致します。

日 時 平成28年7月5日(火) 午後6時30分より
場 所 大隈会館 201・202号室

趣味のゴルフのこと



近野 博

(昭和45年3月商学部卒業)

1. ゴルフとの出会い

ゴルフを始めたのは、昭和49年の秋頃。場所は栃木県の鬼怒川カントリークラブでした。デロイト・ハスキングズアンドセルズという外資系の会計事務所を辞め、昭和49年にクローバー公認会計士共同事務所に入所し、所長の内田善三会計士に手ほどきを受け、練習場で練習を重ねた後のコースデビューは、69、61というスコアでした。高校まで野球をやっており、止まっているボールなんて楽勝と思っていましたが、筆おろしの第1打はボールにかすって10メートルのチョロ。第2打スプーンを振り回したらボールの50センチ手前を叩いて空振りでした。

2. ゴルフに夢中

事務所の上司は二人ともゴルフ好きでしたが、バブルの頃はなかなかプレーの予約が取れずに苦労しました。受付開始日の9時に電話をかけても話し中でつながらず、しばらくしてつながったら既に満席という有様。そのため事務所の電話をプッシュホンに替え、4人一斉に電話、話し中なら即りダイヤル、つながった誰かの電話に私が出で予約ということで、予約が本当に大変でした。ですから、いざプレーとなると、当時はほとんど1.5ラウンドが普通でした。そのころのサラリーマンのオジサン達は、仕事もモーレッツでしたが、ゴルフもモーレッツでした。私は最高2.5の経験があります。

私は個人的には、アメリカのジャック・ニコラスが好きでしたが、日本では青木、尾崎、中嶋のAONが活躍していました。縁あって茨城県の日立高鈴ゴルフ倶楽部の会員になり、倶楽部の競技に参加するようになり、競技委員になり、少しづ



平成27年9月7日我孫子G C

中央左:筆者、中央右:羽川豊プロ、左右:事務所スタッフ

つゴルフの腕を上げていきます。

3. 競技ゴルフ

倶楽部の競技は、月例、倶楽部選手権等よく出場しましたが。理事長杯に1度優勝しました。倶楽部選手権は、決勝戦敗退が1度で、勝つことは出来ませんでした。

その他の競技としては、スポニチ社会人ゴルフに数回出場しました。当時の感覚としては、そういう競技の常連の選手は、週2〜3ラウンド、ほぼ毎日練習というセミプロでした。

普通の勤め人ではとても敵わないので、何か変わったことをしなければならないと思って始めたのがハンマー打法でした。練習の甲斐あってJGA(日本ゴルフ協会)のハンデ2に到達しました。嬉しかったのは、あるコンペで読売ジャイアンツの元監督の川上哲治さんと同じ組でプレーしたとき、朝1番のティーショットを見た川上さんに「近野さん、ハンマー打法ですね」と言われたこと。川上さんもゴルフ上手で、ご自身もハンマー打法に挑戦されたのですが、結局ものにならなくて諦められたとのことでした。

公的な競技としては、日本オープンゴルフの予選と日本シニアオープンゴルフの予選に1度ずつ出ました。ともに予選落ちでした。

4. 公認会計士稲門会のゴルフ

公認会計士稲門会でのお付き合いが始まってしばらくして、稲門会のゴルフの幹事をするようになりました。

「公認会計士ゴルフ稲門会」は、会員のほか大学教授を交えての楽しいゴルフの交歓です。年1度ですが、大体4〜5組程度の参加です。昨年は

27.11.14(土)取手国際ゴルフ倶楽部、西コースで開催されました。参加人数は8名と少し寂しかったのですが、藤田世潤さんがネット72.8で見事優勝されました。私は2位、ベスグロ。

「CPAゴルフ早慶戦」は、毎年1回開催。昨年は27.9.5(土)千葉CC梅郷コースで第34回大会。早稲田5名、慶應6名の計11名の参加。上位3名のグロスで争う団体戦はW255、K272で早稲田の勝利。通算成績は早稲田24勝、慶應10勝。

「CPAゴルフ十月会」は、昭和63年に始まった大学対抗ゴルフです。早稲田の南光雄、慶應の西谷誠一、明治の角田栄八郎、一橋の宗村秀夫、専修の堤昭二の5人の先輩が発起人でした。最初は福島の新倉田舎倶楽部、そして千葉のグレートアイランドクラブ。参加人数の増加に伴い36ホールのコースに代わり、千葉の東急セブンハンドレッドクラブ、鶴舞CCと会場を渡り歩き、近年は概ね100人程度の参加人数。昨年までの3年間は軽井沢72で開催しました。昨年の大会は27.10.10(土)に開催。団体優勝は法政大学。早稲田は団体ベスグロ。

「早稲田大学校友会ゴルフ」には、数年前から公認会計士稲門会として参加し始めました。昨年第7回大会は、27.11.5に埼玉県久邇CCで、43団体、192名のエントリー。ゴルフ

場貸切のフルショットガン方式というスタイル。27ホールから一斉のスタートです。

なんと驚いたことに、我が公認会計士稲門会チームが団体優勝です。また、そのコンペに参加していた86歳の矢島さんが76のエージシュート。350回目とのこと。驚愕でした。競技の記事は、早稲田大学校友会のホームページで閲覧することができます。

5. おわりに

2011年1月11日にそれは突然やってきました。通勤途中の津田沼駅のホーム上で、突然の激しい腰痛。救急車で搬送された病院でのCT検査で、「脊柱管狭窄症」との診断、そのまま入院で5日間の入院生活でした。原因は加齢との宣告。肥満も一因かも。

幸いにも、ゴルフは続けてよいとの医師のありがたいお言葉。実は私の主治医はゴルフ友達。妻は少しガッカリしていました。それ以後は、ゴルフが出来るだけで幸せと思える境地に。会計士仲間や事務所のスタッフとのゴルフを楽しんでいます。公認会計士稲門会のゴルフ幹事もそろそろ後輩に譲ろうかなと思う今日この頃です。

今年の5月で69歳になりますが、可能性がある限り、エージシュートを目指して頑張ります。故藤井博先生(三田会)の後を追いかけて。

日本公認会計士協会会長に 就任するにあたって



関根 愛子

(昭和56年理工学部卒業)

私は、この度、日本公認会計士協会の次期会長として推薦、信任され、来る7月25日に開催される定期総会の終了後に会長に就任します。会長立候補の前提となる協会本部役員選挙におきましては、稲門会の皆様からの温かいご支援を頂きありがとうございました。

現在、私たちの業界に対して非常に厳しい視線が注がれています。公認会計士監査の信頼性を高め、わが国経済の健全な発展にいかに関与できるか、私たちの真価がまさに問われています。こうした重要な局面において会長という大役を預かることとなり、責任の重さをひしひしと感じ、これからの3年間は、信頼回復と発展に向けて、全力を尽くしていく所存です。

公認会計士は、現在、監査に限らず、様々な業務に携わっていますが、独占業務である監査の信頼の問題は、私たちの職業基盤をゆるがしかねません。そのため、次期会長としては、公認会計士監査の信頼回復が最重要課題と認識しています。既に協会は、会長通牒を発出するなどの施策を遂行すると共に、本格的な対応に向けて監査強化対応会議で検討を開始し、できることはすぐに手を打って進めていますので、これを引き継ぎ、対応を進めていく予定です。

監査の信頼回復のためには、まずは、監査の現場を強くする必要があります。監査環境を整備・改善し、職業的懐疑心を発揮し、不正リスクに着眼した監査が行えるようにすることが重要です。これは一朝一夕にできるものではありませんが、たとえば、監査期間、時間の確保につとめ、監査経験を補うべく不正事例の研修を充実させていきたいと考えています。同時に、自主規制機能の強化、

あり方の見直し等も進めていきます。さらに、めまぐるしく動く現代社会において、今後起こり得る事象に備え、様々な点に目を向けて長期的な視野で検討し、社会に発信していくことも重要と考えています。

なお、こうした取り組みの実施にあたっては、関係者との連携は欠かせません。公認会計士監査は財務情報に信頼を付与することにより企業の適正な経済活動を支えていく重要なインフラであり、その信頼回復についても、関係者からの視点を踏まえることが重要だからです。

監査の信頼回復が急務な一方で、社会福祉法人等への会計監査の義務化をはじめ、公認会計士が求められる分野が拡大しつつあります。また、同時に、その業務を大都市集中から全国各地へ広げるものとしています。たとえば、現在拡大が見込まれる公的・非営利分野は必ずしも大都市集中ではありませんし、地方創生、地域経済の活性化のために必要とされる中小企業の稼ぐ力を高めるには、公認会計士による個々の企業に応じたきめ細かい支援が重要です。

そうした、多様化し、拡大する業務において、信頼される品質を確実に提供する体制を確保し、様々な形で社会に貢献する公認会計士が活躍できる環境を整備していくことが重要であり、これが2番目の課題と考えています。

そして、これら2つの課題に対応していくためにも、重要なのは、優秀な人材の確保です。しかし、公認会計士試験の受験者の減少はまだ止まりません。これには様々な理由があり、監査現場での疲弊感をはじめとした山積する人材面での課題について、しっかりと対処していかなければなりません。と、同時に、多様化、そして国際化する業務において公認会計士の活躍への期待が高まっており、様々な分野で多くの公認会計士が活躍していることがあまり認識されていないように思います。こうした公認会計士の姿を継続的に広く紹介し、魅力と認知度の向上につとめていきたいと思っています。

行うべきことは多数ありますが、私たちの業界は、信頼、そして多様で豊かな人材が財産となります。皆が生き生きと働き、経済の発展に寄与し続けていけるよう、全力を尽くしていきます。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

「会計士から見た早稲田の今」



奈尾 光浩
(昭和56年卒業)

1981年に公認会計士第2次試験に合格してから早いもので35年となります。その間、様々な業務に携わってきましたが、学校法人監査（私立学校に対する監査）という領域はずっと続けております。お陰様で日本公認会計士協会の学校法人委員会には、現在までに通算14年参加し4年ほど委員長も務めさせていただきました。その関係で、大学の計算書類の分析をしたり、あるいはガバナンスや内部統制を研究されている大学の先生方からお話を伺う機会も増えてきました。

世間一般では少子化で私立大学の経営が大変厳しく、早稲田も大変だと考えられているようです。一方、大学の方々、特に教員の方々は財務数値を基に大学経営を議論する機会が少なく、倒産などありえないとお考えのようにも感じられます。そこで、財務数値を使って大学経営の今について考えてみたいと思います。

多くの大学はホームページに財務内容を開示しており、もちろん早稲田もかなりの水準で開示しています。文科省も財務内容の公開を推進しており、文科省のホームページでは全国の私立大学の財務内容の開示ページに繋がるリンクが貼ってあります。

さて、平成27年3月に終了する事業年度（平成26年度）は学校法人会計基準の改正初年度にあたり、損益計算書に相当する事業活動収支計算書が作成され段階別の収支が表示されることになりました。

本稿執筆時点では新基準による計算書類はどこにも存在しないため、筆者の私見で早稲田のホームページにある過去の計算書類を新基準に組み替えてみました。

それによると、平成25年度、26年度の教育活

動収支差額はそれぞれ5,286百万円、2,824百万円となります。教育活動収支差額を営業利益ととりあえず考えていただくと、教育活動収入（授業料や経費に対する補助金等の学校法人の主たる収益、早稲田は概ね1,000億円弱です。）に占める教育活動収支差額の割合（教育活動収支差額比率）は5.3%、2.9%となります。また、経常利益に相当する経常収支差額は6,398百万円 4,758百万円となり経常収支差額比率（経常収支差額÷経常的な収益）は6.4%、4.7%となります。

大学の目的は利益獲得ではないため、これらの比率が高ければ良いというわけではありませんが、財源がなければ十分な教育研究が行えません。現時点では、早稲田は教育研究活動を十分維持していけるだけの収支状況にあることはご理解いただけると思います。

実は、筆者の計算では日本の私立大学全体で見ても（附属病院がある医歯系を除きます。）教育活動収支差額比率は平成25年度3.4% 平成26年度2.5%、経常収支差額比率は同じく5.1% 4.6%となっています。大学全体で見ると急に大学がバタバタと倒産する状況にはないということがご理解いただけるものと思います。

しかしながら、21世紀の後半には18歳人口が60万人程度となり100歳以上の人口と同じになるという予測もあります。長い目で見ると、現状のままですべての大学が存続できるとは考えにくく、それは早稲田とて同じです。（個人的には22世紀に早稲田が慶応と合併していたとしても不思議はないと思っています。）

とはいえ、自分の定年までは何とかなると考えるのも人情というもので、将来を見据えて変革というのはなかなか難しい。しかしながら、それができなかったことが日本経済の失われた20年を招いたようにも思います。

このような時期に必要なのは、計算書類を冷静に分析し、常識をもって大学の将来を考えていくことではないでしょうか。大学が危いといった俗説に惑わされず、計算書類の中から将来のリスクを読み取っていく姿勢、これこそ公認会計士の得意とするところであり、一度計算書類を大学のホームページからご覧になってはいかがでしょうか。

「人間万事塞翁が馬」



吉川 征志
(1991年商学部卒業)

私は現在大手監査法人のマネジャー職として上場クライアント、会社法単独監査クライアントへの監査業務の提供を中心とした毎日を送っております。今回、公認会計士稲門会の会報へ寄稿の機会をいただき、改めてこれまでの自分の歩みを振り返ってみると、思い通りとは言い難いものの、様々な縁に導かれて多忙の中にも充実した今があることを感じています。

まず、大学時代は、軟式野球のサークル活動中心の毎日を送り、商学部に籍を置きながら、ゼミでは財政学を専攻し、会計学や監査論とは無縁の生活を送っていました。

その後、いわゆるバブル絶頂期に卒業し、外資系IT企業の営業として社会人生活をスタートしました。営業時代は、自社製品や業界・顧客の知識、顧客ニーズを引き出すコミュニケーション能力、社内外のリソース活用やスケジュール管理のためのプロジェクト・マネジメント能力など、当然ながら、多様な知識・能力が必要とされました。「営業職はゼネラリスト」とも言われますが、全てが表面的な理解に留まっているように感じつつも、多忙を言い訳に専門性を磨く努力を怠っているのではと不安から、遅ればせながら何か軸になる知識・能力を身に付けたいと思っていた時期に、新規顧客開拓の一環で各種システムのデモを企画・運営する機会がありました。こうした企画を通じて会計士、不動産鑑定士、社労士といった士業の方々とも仕事でご一緒させてもらい、あらゆる企業・組織で管理は数字で行うこと、その数字の多くは会計ルールに則って示されることを改めて実感し、会計の知識・能力が資格という形になる会計士試験への挑戦を決意しました。

二次試験に合格した後は、業務経験を積むにあたって監査法人勤務が早道と思い、現在の監査法人にお世話になることとしましたが、その時点では「会計もわかるビジネスマン」となることを志向していましたので、監査法人で法定監査、IPO、税務、デューデリジェンス、再生支援など、一通りの経験を積んだ後に、いずれはコンサルティング業等での独立開業をと考えていました。

ところが、入所数年でJ-SOX及び四半期レビュー制度の導入が決まり「これら新制度を知らずして『会計士』とは言えまい」と感じ、担当クライアントへの新制度の導入準備から定着まで全力で対応し、これら制度も安定期に入ったと感じたころ、今度は日本でもIFRS導入機運が高まり、担当クライアントでも具体的な検討が始まりました。またしても「今後、IFRSを知らずして『会計士』と言えるのか」との思いから、目の前のすべきことに集中して今に至っております。

稲門会活動においても、会計士補時代からお世話になっている早稲田OBパートナーからお誘いをいただき、若手幹事会メンバーに加えていただいたことが縁で、今期からは監査法人内の稲門会幹事も拝命しております。

結局、十数年に及ぶ監査法人勤務では、デューデリジェンスを多少かじった以外はほぼ監査業務に従事しており、漠然とはいえ当初思い描いていた「会計もわかるビジネスマン」としての独立開業とは異なる道を歩んでいますが、様々な縁に導かれて充実した今があると感じています。

「人間万事塞翁が馬」。吉凶・禍福は変転し、予測しえず、世の中なかなか思い通りにいかないものとの実感もあるものの、その一方では、思い通りにいかないことを安易に悲しむべきでもなく、そこまでのプロセスを自分に恥じないように進めていけば、充実感は得られ、結果は時の運と考えられるようにもなりました。

これからも、目の前の問題に対してその時々で何をどうすべきかを真剣に考えて取り組み、結果のみに一喜一憂することなく、様々な縁に導かれつつ自分に恥じることなく毎日を過ごし、その結果を安んじて受け入れられるような人でありたいと思っています。

「私とゴルフ」



窪田 新平

(2009年 政治経済学部卒業)

この度は会報に寄稿させていただく機会を頂き、大変光栄に思います。

折角の機会ですので、長年の趣味であるゴルフについて、お話をさせて頂きたいと思います。

1. ゴルフとの出会いと学生時代

珍しいとよく言われますが、私の父はプロゴルファーです。昔はトーナメントにでていましたが、現在はゴルフスクールを運営しながら、千葉の我孫子にある中央学院大学（最近では駅伝で有名）のゴルフ部コーチをしています。そんな父のもと、家族や親戚の多くがゴルフをするので、私も高校（学院）入学を機に何気なくゴルフをはじめ、大学でも体育局ゴルフ部に入りました。私が大学に入学した時代からでしょうか、スポーツ推薦で毎年1名ずつ全国レベルの強者がゴルフ部に入部するようになり、私のゴルフの世界観は大きく変えられました。ゴルフ漬けの大学4年間を強い人間と切磋琢磨できたこと、早大ゴルフ部という歴史ある部で、部長先生（佐藤紘光先生、大塚宗春先生）やその他OBOGの方から、様々なアドバイスをもらえた経験は今までの人生でかけがえのないものだと感じています。また、公認会計士を志したきっかけもゴルフ部OBの先輩に憧れてのものでしたし、とかく、私の今の人生はゴルフをはじめていなければ、なかったものだと思います。

2. 日経カップ2015 準優勝

昨年話となりますが、日本経済新聞社が主催している「日経カップ 企業対抗ゴルフ選手権2015」にあずき監査法人の代表として出場しました。日経カップについてご存知でない方も多いかと思いますので、簡単に説明させて頂くと、日経



カップはこれまでに23回の歴史を持つ、ゴルフにおける企業日本一を決める大会です。イメージしやすく言うと、サラリーマンゴルファーの甲子園といった感じでしょうか。日経新聞が主催しているということで、予選を含め150社以上の出場会社には有名企業が数多く名前を揃えています。日経カップには年齢制限（その年の12月31日時点で満30歳以上）があるため、私は昨年が初出場だったのですが、予選は69ストローク（大会歴代ベストスコア）でチームを牽引し9年ぶりの決勝進出に貢献、決勝は74ストロークで個人戦準優勝という結果でした。体育局のゴルフ部出身ということで、あずき入社時から期待されていたので、なんとか面目を保てて、内心ほっとしています（笑）ただ、日経カップで後悔したことが一点あります。それは前半終了時点でトップであることを聞き、雑念が生まれてしまったことです。日経カップの決勝大会はTV放映もあり、表彰式もあります。もし、個人戦で優勝した場合は優勝スピーチをすることになると思い、ラウンド中に優勝スピーチを考え始めてしまったのです。この無駄な雑念によりゴルフへの集中が薄れてしまいました。後悔先に立たずとはよく言ったものですが、今後は昨年の反省を活かし、公認会計士としてサラリーマンゴルファーの頂点を目指していきたいと思っています。

3. 今後への取り組み

ゴルフはメンタルのスポーツとも言われますが、メンタルが弱いと厳しい環境に陥った時に本来の実力を発揮することはできません。ゴルフをしながら常に思いますが、ゴルフは仕事との共通点もとても多いかと考えています。

以下、私のゴルフの信条です。

『メンタルを強く保ち、攻めるところは攻め、守るところは守る。』

まだまだ会計士として未熟な私ですが、ゴルフ

を通して学んだ信条を仕事にも活かしていければと思う今日この頃です。今後は、ゴルフを介して頂いたご縁も大切にし、会計士としてレベルアップをしていきたいと思います。今後とも皆様のご指導ご鞭撻を頂けますと幸いです。

会費納入のお願い

今年も会費納入の季節となりました。同封致しました振込用紙で御振込頂ければ幸いです。また、公認会計士稲門会のホームページ(www.cpa-tomonkai.jp/)の「お問い合わせ」からご入力ください。なお、ご自身の会費納入状況をお知りになりたい方は、会計担当副会長もしくは常任理事にご連絡下さい。

公認会計士 6,000円 日本公認会計士協会準会員 3,000円
(振込先 郵便振替口座 東京7-163893 口座名 公認会計士稲門会)

公認会計士試験合格祝賀会



松下 八寿彦
(1980年 商学部卒業)

3月22日にリーガロイヤルホテル東京において、公認会計士試験合格祝賀会が盛大に開催されました。平成27年の公認会計士試験の最終（論文式試験合格者）合格者数は、1,051人（対前年比51人減）、合格率10.3%でした。本学最終合格者数は、この会報の最終ページにあるように91名（学部・大学院全体では119名）でした。当日は、約50名の合格者、会員50名が参加しました。

ここ数年、受験者数、合格者数が減少しており、合格者にとっては売り手市場で良い雰囲気祝賀会でしたが、業界としてはもっと受験生を増やす方策、PR活動が必要と思います。

本合格祝賀会は、早稲田大学公認会計士講座と公認会計士稲門会の共同で主催しています。

合格者への出欠確認、本祝賀会の受付等は会計士講座のスタッフの皆さんが手伝ってくれています。また、祝賀会の運営費は、本祝賀会の会費で賄っており、この場を借りて出席して下さった会員の皆さんの御礼いたします。

渡辺俊之会長の挨拶、小西彦衛副会長の乾杯の発声、会計研究科長佐々木宏夫先生、秋葉賢一先生の祝辞をいただきました。その後、初の試みでしたが合格者の自己紹介がありました。合格者と会員の歓談で大いに盛り上がりしました。早稲田大学応援部による、『紺碧の空』、『早稲田大学校歌』斉唱、和やかな内に20時30分散会となりました。その後、2次会を1階のフェリオで開催しました。



「会計士人生のスタートにあたって」



西浦 啓一郎

(平成 27 年 会計研究科修了)

この度、公認会計士稲門会の会報に寄稿させていただくという貴重な機会をいただくことができ、大変光栄に思っております。

私は本年3月に大学院会計研究科を修了し、現在、あずさ監査法人にて監査業務、株式上場（IPO）支援業務に従事しています。入所後初めての期末監査もようやく一段落してきたこの機会に、改めて早稲田大学での学生生活、会計士試験合格までの道のりを、振り返らせていただければと思っています。

私が公認会計士を本格的に志したのは、24歳のときでした。大学卒業後は政府系金融機関に就職し、中小企業向けの融資業務に従事してきましたが、日々の業務をやっていく中で、もっと自分の専門性を磨いていきたい、会計・監査の専門家になりたいとの思いが強くなり、学問と実務を融合させたカリキュラムが幅広く展開されており、会計専門家の養成で一定の実績をあげている会計研究科に入学する運びとなりました。

前職を退職したうえでの挑戦、キャリアチェンジで、正直、不安が全くなかったわけではありません。いつ合格できるかわからない不安に押しつぶされそうになりながらも、会計研究科の授業、ワークショップ（少人数でのゼミ科目）を積極的に履修し、新たな知識の習得に励んできた2年間でありました。入学直後は、授業についていくのもやっとの状態で、成績も芳しくないような状態

でしたが、授業の復習を大切にし、なぜそうなるのか、結論の背景や論理構成をじっくり考えながら勉強してきたおかげで、少しずつ自分の言葉で説明できるようになっていったと記憶しています。

公認会計士試験合格までの道のりにおいて、私にとって一番重要だったことは、同期、先輩後輩たちとの交流、情報共有でした。公認会計士試験は、長期に渡る試験であり、常に自分との戦いです。模試の結果もうまくいかないことの方が多く、挫けそうになったことも何度もありました。そんなとき、みんなで問題を出しあったり、わからないところを相談しあったりしたことが、私の勉強へのモチベーション、心の支えとなりました。卒業した今でも、気軽にご飯や旅行に行ったりできる一生の友人を作ることができたことは、早稲田大学に在籍できてよかったと心から思える点です。

私自身、大学院では主に、IFRS（国際会計基準）と独SAP社ERPシステムについて学んできました。会計士としてのキャリアが多様化する今日、会計+αの知識・経験を身につけ、自分にしかない価値を発揮していくことが今後、ますます重要になってくることと思います。「会計」という共通言語を通して、世界中で活躍できる公認会計士になれるよう、今後も様々なことに積極的にチャレンジし、自分を高めていきたいと思っています。

最後になりましたが、無事、大学院2年在学中に念願の公認会計士試験に合格することができたこと、また合わせて2015年度会計研究科優秀賞を受賞できましたことは、ひとえに稲門会の諸先輩方、会計研究科の先生方の多大なご支援があったからだと感じております。この場をお借りしまして、厚く御礼申し上げます。まだまだ未熟な身ではありますが、引き続き先輩方のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「周りの方々に恵まれて」



湯口 朋拓
(政治経済学部4年)

この度は公認会計士稲門会会報に寄稿する機会を頂き、大変光栄に思います。恐縮ではありますが、公認会計士試験に合格するまでとこれからについて書かせていただこうかと思います。

1 合格までの道のり

私には会計士試験を受けるとなったときに絶対にこれだけは守ろうと心に決めたことがありました。それは「試験勉強だけに専念するのではなく、なるべく普通の大学生と同じような経験もしよう」というものです。普通とはなんののかという議論があることは重々承知しておりますが、当時の私は会計士はいわゆるガリ勉になるものだと勝手にイメージしており、そのような人間にはなりたくないと思っていました。ただ仕事になる資格が欲しかったということもあり、欲張りな私は普通の大学生であることと会計士試験に合格することの二兎を追うこととしました。

そしてある程度普通の大学生活を送りながらここに寄稿させて頂けるような立場となることができましたのですが、それは決して私の力ではなく、周囲の方々の協力があつたからこそです。特に家族には金銭的な面、普段の生活の面をはじめ、多くの迷惑をかけました。また応援してくれる友人、一緒に試験を受ける受験生仲間など多くの方に支えていただきました。皆様がいくださったからこそ今があるのだと心の底から思っております。この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2 これからの夢

私が会計士になって、やりたいと思うことは

2つあります。1つ目は若手企業家や経営者のサポートです。と申しますのも私が受験生時代に打ち込んだものとして母校の中学でのサッカーのコーチというのがあります。そこでは、未熟者ではありましたが、自分の知識や経験を自分より若い世代に伝え、サポートしていくということの楽しさとやりがいを感じました。そのような経験、また実際に自分が色々な方々にサポートしていただいたことの恩返しとして、自分より下の世代の役に立てるような人間になりたいと思います。

2つ目は公認会計士のイメージを変えることです。先ほど申し上げた通り私の中では会計士はガリ勉というイメージがありましたが、実際にこの業界に入ってみるとむしろ魅力的な方が多く、とてももったいなく思いました。また、私が合格した後に大学の友人からは「会計士ってなにしているの?」という質問をよくされたりもしました。こんなにも魅力的な方々多い世界なのに、注目度が低いのは悔しいので、将来は会計士のイメージを変える、具体的には会計士をメディアに出すサポートをしていけたらと思っています。そしてこのようなことをすることで会計士に依頼される仕事が増え、業界が盛り上がっていくのではないかと、僥倖ながら夢見ております。

3 今の私にできること

色々夢について書かせていただきましたが、今はまだ自分では手の届かないこと、力が足りない事ばかりだと、合格してからより感じます。今後はまず自分のやるべきことをしっかりやること、そしてその上で色々なところに出向き、色々な方と話し考えることが今の自分にできることだと思います。会計士試験がそうであったように、今後は自分一人ではなにかを達成することは難しくなります。周りの方々と協力しながらなにかを達成していくしかありません。そしてそのために協力してもらえる魅力的な人間にならなければならないと思います。

今後も稲門会の集まりにはなるべく顔を出させて頂くので、未熟者ではありますが今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

「奨学生との交流」



(奨学事業委員会委員長)

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

当会の奨学事業委員会は、一定の役員のあて職として、会長、前会長、総務担当副会長、奨学事業担当副会長で構成して、奨学生の選考を主な職務としています。奨学生との交流にも臨んでいます。以下に奨学生との交流について報告します。

選考書類にみる奨学生

奨学生との交流は選考書類から始まります。主な書類は本人からの奨学生申請書と指導教員からの奨学生推薦書です。留学生の志、向学心、研究テーマ、目指す進路、日本留学の思い、暮らしぶりを知ることになります。選考書類が個人情報であることから、慎重に管理しています。

「総長招待 指定寄付奨学生のつどい」

本学では毎年12月に「総長招待 指定寄付奨学生のつどい」を開催し、趣意を定めて奨学金を給付する指定寄付奨学金を提供している個人と団

体を招待して、奨学生並びに鎌田薫総長はじめ大学関係者と和やかに交歓しています。平成27年度は渡辺俊之会長と藤田世潤副会長が出席しました。当会奨学事業の意義と学内における存在を実感する機会です。

当会の定期総会懇親会

当会の定期総会懇親会にその年の奨学生を招待して、会員の皆様が奨学生と親しく懇談しています。出席会員の皆様には、留学生の意欲を汲み取り、早稲田に学び社会で活動することを語っていただくとともに、アジア地域を感じ取っていただければ幸いです。

奨学生が活かす奨学金

奨学生が奨学金をどのように活かしているか、総じて次のようなことが分かりました。

- ・奨学金を学費や図書購入に充てた。
- ・アルバイトを止めて、勉学に専念し、卒業論文や修士論文に集中することができた。
- ・生活が苦しいため、退学して帰国するところだったが助けられた。
- ・母国と日本の架け橋になることを心掛ける。
- ・公認会計士稲門会の皆さんと歓談できたことが良かった。

奨学生が素直に喜びを表してくれることは嬉しいことです。

この有意義な奨学事業を是非とも続けなければと思います。

公認会計士稲門会奨学事業 25 周年 －平成27年度奨学事業報告－



(奨学事業委員会委員長)

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

平成27年度は創設25周年を迎えて、給付奨学金の累計額が5千万円に達し、支援した留學生が100名になりました。公認会計士稲門会奨学事業を創設してくださった諸先輩、本奨学事業にご理解をいただき、奨学資金をお寄せいただいております多くの会員の皆様へ敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

今回は本奨学事業の運営の要点を説明して事業報告とします。

奨学事業の意義

本奨学事業はアジア地域からの留學生を対象にしています。早稲田大学は草創期から今日までアジアとの学術及び人材の交流に重きをおいており、アジア地域からの留學生を支えることは、その趣旨に照らして有意義なものと存じます。併せて近隣諸国との友好促進のために自分たちができることを行うこともこの奨学事業の趣意としています。

奨学資金の募金と奨学金の給付

奨学資金は早稲田大学への寄付金として、大学の口座に振り込んでいただきます。総長名の領収書と所得税の寄付金控除の証明書等が発行されます。本学では寄付金に関することを総長室募金課が担当しています。

皆様からの奨学資金を原資として、毎年、留學生4名に各50万円の公認会計士稲門会奨学金を給付しています。本学では奨学金に関することを



学生部奨学課が担当しています。本奨学事業は運営面では当会と奨学課の共同事業です。

奨学生の選考

選考要件は、①アジアと日本の友好親善という目的を理解する ②将来は母国で社会的に活躍する志望がある ③他の奨学金を受けられず、生活に困窮している ④学業成績は問わない ⑤学部3年生以上または大学院生 です。

次の手順で選考します。当会が奨学課に選考要件を示して留學生4名の推薦を依頼する。奨学課は学内募集して奨学生候補を当会に推薦する。当会の奨学事業委員会が書類選考により奨学生を決定し、奨学課が奨学金を給付する。

奨学資金のお願い

“広く薄く”を方針として、より多くの皆様に無理のない拠出をお願いしています。有為な人材を育む本事業を永く続けるために、幅広い卒業年次の会員の皆様の参加をお願いいたします。

寄付のインターネット申込み

早稲田大学のWebサイトから常時寄付申込みができます。〔早稲田 寄付〕検索 で寄付トップ画面に入ります。寄付申込みフォームにインプットする際に、「寄付の種類」は「奨学金」を選び、「指定先」は「公認会計士稲門会奨学金」を選びます。支払方法はクレジットカード決済又はインターネットバンキング決済（ペイジー）です。

平成27年度の事業実績

1. 奨学金の支給状況

大学より次の4名を奨学生として推薦いただき、各人に50万円を支給しました。

張 起源 国際教養学部 4年 韓国

TAN, Weixin 創造理工学部 3年 マレーシア

YOSEPH, Michael Bimo Priyo Tamtomo 創造理工学部 3年 インドネシア

代 葦 教育学研究科 修士2年 中国

2. 奨学事業収支年度別一覧(単位:万円)

年 度	H3～H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	累 計
寄付金収入	4,539	165	148	199	135	121.5	5,307.5
(寄付者数)	(平均66名)	(62名)	(53名)	(56名)	(49名)	(45名)	(1,586名)
奨学金支給額	4,000	200	200	200	200	200	5,000
(奨学生数)	(80名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(100名)
資金繰越残高	539	504	452	451	386	307.5	

3. 平成28年度寄付者芳名(順不同・敬称略) 平成28年3月31日現在

渡辺 俊之 近野 博 勝島 敏明 藤田 世潤 奥山 章雄 安村 長生 内田 善三 小林 晟祐 佐藤 正典
 飛永 信雄 社本 公一 隆島 唯夫 西山 隆司 関根 愛子 高井 宏司 水野 義雄 鈴木 豊 石田 清絵
 山口 俊明 山田眞之助 上野 紘志 尾崎 隆昌 石原 裕 小林 正樹 福田 安孝 金田 賢二 七松 優
 長峯 徳積 黒沼 憲 杉田 純 塚田 知信 堀内 三郎 渋谷 道夫 伊勢 利一 倉橋 暁 岡野 雄次
 古川 勉 鴛海 量良 小暮 和敏 堀 秀行 大滝 史博 関口 典子 津田 英嗣 四月朔日丈範 小西 彦衛
 以 上

編集後記

新緑の頃、本号にご寄稿していただいたゴルフのシーズンです。

監査が超多忙の中、寄稿してくださった会員、合格者の皆さんありがとうございます。

会員の方の仕事は勿論、趣味等幅広く投稿してい

ただき楽しい紙面作りを目指しておりますので、よろしく願いいたします。

(会報担当 松下八寿彦、編集担当 小口敬、古知新、衛藤祐介)

(印刷所 三共総合印刷株式会社)